

あの彦左衛門は
話中の人物だったか？

「天下の御意見番」として徳川家康の暗闘に答えたり、鳥屋の一心太助と共に江戸の庶民を助けたり、あるいは旗本以下の者が駕籠での野暮を察した際、麻紐で竹竿にくくりつけた大盤に乗って登城し、見咎めた役人に「これは、駕籠にあらす」と言い返した等々……数々の逸話で知られるのが、大久保彦左衛門だ。

だが、残念ながらこれらはすべて明治になってから講談師が創作し、世にはまった虚像である。

大久保一族は三河国(現知県東部)の土曜の出で、古くから松平家に仕えていた。彦左衛門は通称で、本名を大久保忠教。生まれたのは「桶狭間の戦い」で東海雄・今川義元が織田信長に打ち取られた水碓。(1560年)年だった。

彦左衛門が兄・忠世とともに遠江平定戦に参加したのは17歳の時。初陣は大原城での合戦だった。天正18年(1590)の小田原征伐の後、主君徳川家康が江戸に移封されたことで、忠世と子で甥・忠勝が相模国小田原城主に任じられた。この時、彦左衛門も3千石を与えら

る。彦左衛門は「旗は倒れていない」と突っぱねた。「そんなはずはない」と激怒する家康の言葉に怯むことはなく、頑強にそれを否定したのだ。



東京白金の「立行寺」に立つ大久保彦左衛門の墓。

彦左衛門の墓の隣には「一心太助」の墓も。

れ、慶長5年(1600)の「関ヶ原の戦い」では、家康本陣で徳川軍を助けた。

だが、忠勝が大久保長安事件に連座して失脚、改易になると、それにともない彦左衛門も改易。その後、駿府へと召し出され、家康直臣の旗本として三河国額田に1千石を拝領し復讐することになった。

その名を高からしめた
「大坂夏の陣」

彦左衛門の名を世に知らしめたのが慶長19年(1614)「大坂夏の陣」だった。彦左衛門はこの戦いで徳川軍として参陣。大坂の陣は徳

川軍圧勝で終わったものの、戦には想定外のトラブルが付き物。それが、真田幸村による徳川大軍への乾坤一擲の突撃だった。幸村軍兵は、まるで無人の野を行くが如き獅子奮迅の体。結果、歴戦の勇者揃いだった家康の旗本衆が総崩れになり、その際に本陣の旗が倒れてしまうという狼狽ぶりを見せた。

この時代、総大将は戦場が見渡せる場所、即ち味方軍の後方高めの位置に本陣を置き各部隊に指令を出していた。そのため前線の各部隊長は、常に後方にいる本陣を意識し自分たちの働きをアピールしていた。それが後日の悪貨にそのまま反映された。

一大事

立行寺 大久保彦左衛門忠教

映画で見た。「一大事」昭和33年であった。

太助は中村錦之助、大久保彦左衛門は月形龍之介。小気味いい太助の唖吟、「天下の御意見番」として舌鋒鋭く参人ばらまを問いつめる彦左。

愉快なのは、この映画で敵役だった逆藤英太郎が、後にテレビの「大久保彦左衛門」で、彦左衛門と主役を演じたことだ。大久保彦左衛門——勧善懲悪、悪敵の下がる時代劇であった。



月形龍之介による、あの有名なシーンに乗って登城の関(明治17年)。

の美事であり、彦左衛門一世一代の一大事。だったのではなからうか。

自著『三河物語』

彦左衛門の忠義を知った家康は振り上げたこぶしを静かに下した。だが、時代は大きく太平へ移り変わろうとしていた。彦左衛門は徳川家への忠義を貫く典型的な三河武士。戦が無くならない、彦左衛門ら古兵は次第に徳川家の中で密隊に追いやられるようになる。忠節や信義より弁舌でのし上がっていくようを輩が頼をさかせるようになってきたのだ。

そこで、思いついたのが『三河物語』の執筆だった。『三河物語』はその名が示す通り三河武士の統領たる徳川氏の来歴と家康の一代記を描いた「徳川創業史」だった。そこには



電光朝露
石火のごとくなる業の世に
何と人生を送るうとも
名誉より大切なものはない
人は一代、名は末代と
心得よ!!

おわくほひござえもんだだか●永禄3年(1560年)~寛永16年2月29日(1639年4月2日)。徳川家康・大久保忠教の人名。多くの功によって徳川旗本の中でも重きを成した。出陣時の屋敷は神田区西の「原町台」。余生を東陽園に過ごし、『三河物語』を著す。幕府の2000石の太身となったが、忠教が晩年の彦左衛門に5000石の加増を打診するも、「命懸けに命を白身には有り難いが不蒙」と固辞。良くも悪くも古武士であった。墓は知行地の愛知県岡崎市電光寺町「徳川山王院長徳寺」。京都市上京区上之町町「光了山本海寺」。東京都港区白金の「智光山立行寺」。立行寺は彦左衛門によって建立されたため、通称「大久保寺」という。



左/立行寺山門の左には「史跡 大久保彦左衛門墓」の木柱神が立つ。右/立行寺の山門。

からだ。

つまり、目印である本陣の旗は絶対的存在であり、それが倒れることは総大将が戦死したか、あるいは逃げたかのどちらかを意味していたのである。

当然のごとく、戦後二条城では「旗」をめぐる争奪戦が始まった。

家康はか詰将は旗が崩れたと証言。だが、旗奉行は混乱の中、その場を離れていたため確認ができない。そこで最も近い場所にあった彦左衛門へ

の代々が昇られる、東京における大久保家の菩提寺でもある。宝印堂を彦左衛門の墓は上部が小さな唐破風造りの墓廟に仕立てられており、その傍らには講談でお馴染みの一心太助の墓が立つ。

彦左衛門と一心太助の物語は關原南北の弟子として知られる河竹黙阿弥が歌舞伎の題材として書いたもので、その後、講談をどうで人気を博すようになった。

彦左衛門は自分の出世を願わず常に多くの浪人を養っては、その戦活動に奔走するを、戦後の士として多くの人々から慕われていたのは事実だったようだ。

家康・秀忠・家光の三代に仕え、戦場の生き残りとしての自負と誇りにかけて古武士の意地を貫き通した男——それが大久保彦左衛門だった。